広島大学大学院文学研究科　帝釈峡遺跡群発掘調査室年報ＸＸＶ
広島大学考古学研究室紀要　第３号、2011年、23～38、44～51頁。

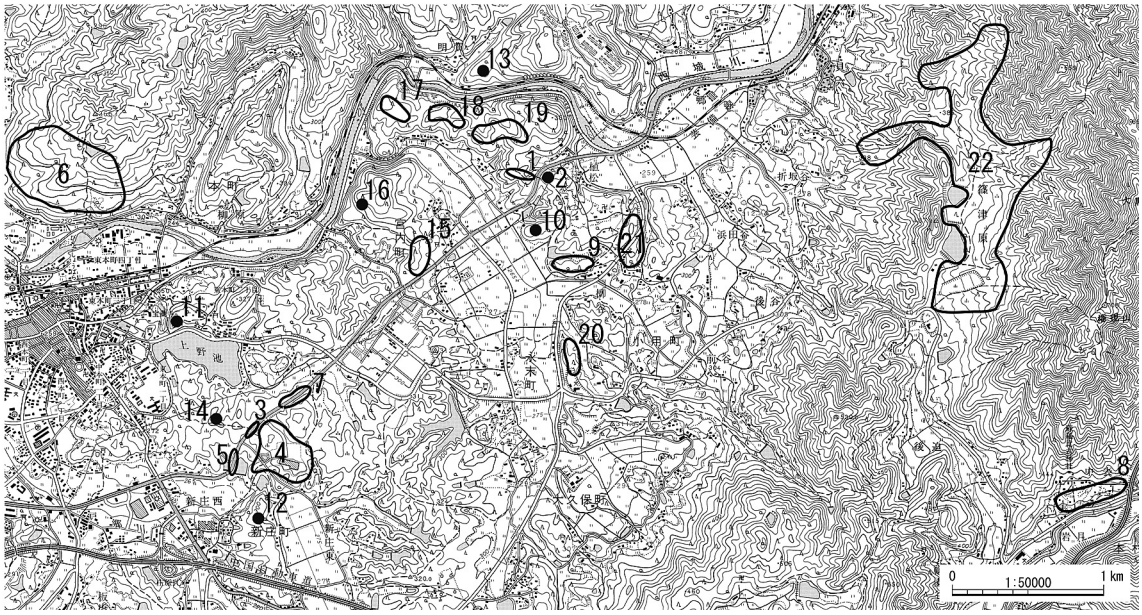
佐田峠墳墓群（第４次）の調査

野島　永・脇山佳奈・齋藤友紀・津田真琴・
今津和也・谷口早季・横山瑛一

１．位置と環境

広島県庄原市宮内町佐田峠ほかに所在する佐田峠墳墓群は、庄原市市街中心部から市北部の西城町へと走る国道183号線沿いに北東へ４kmほど離れた、西城川左岸の低丘陵上に位置している（第１図）。佐田峠墳墓群から南西2.5kmには、弥生時代中期から後期にかけて営まれた和田原遺跡（藤田 1988、松井編 1999、稲垣編 2001、稲垣・今西編 2004他）がある。弥生時代中期中葉から後期にかけての住居跡群が調査され、精緻な文様をもつ塩町式土器が多数出土した。当該墳墓群の造営時期に併行して営まれた集落跡であり、佐田谷・佐田峠墳墓群の被葬者達が何らかの形で関与していた可能性が高いといえる。また、同一丘陵上で南東に接して佐田谷墳墓群がある。弥生時代後期初頭に造営された佐田谷１号墓は初期四隅突出型墳丘墓であり、木棺・木槨構造を埋葬施設としてもつ最古の墳丘墓であることも明らかとなっている（妹尾編 1987）。佐田谷３号墓周溝付近からは塩町式土器が出土していることから、佐田谷墳墓群も中期末葉頃から造営されていた可能性はあるものの、一昨年度の年報（野島・石貫・小林・辻村・宮岡 2009、46・47頁）にもあるように、佐田谷１号墓と類似した墳丘形態をもつ３号墓も含めて後期初頭から前葉に降るものである[(1)]。

（野島　永・齋藤友紀）

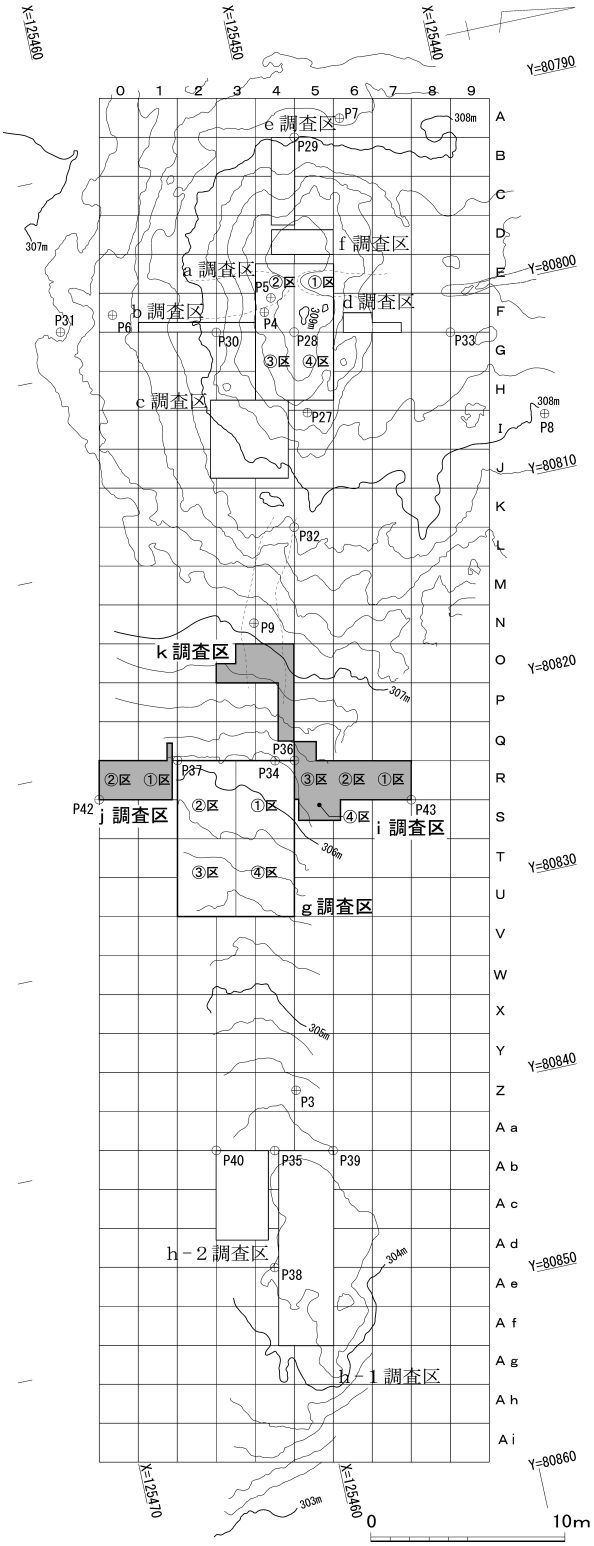


第１図　佐田峠墳墓群周辺主要遺跡分布図（1/5000）

１．佐田峠墳墓群　２．佐田谷墳墓群　３．小和田遺跡　４．和田原遺跡群　５．西山遺跡　６．御神田山遺跡群
７．永宗遺跡　８．鍬寄遺跡　９．広政古墳群　10．矢崎古墳　11．瓢山古墳　12．地王神社古墳　13．唐櫃古墳
14．牛塚古墳　15．陰地古墳群　16．殿畠山古墳　17．大歳古墳群　18．山根古墳群　19．寄藤山古墳群
20．永末古墳群　21．柳谷古墳群　22．篠津原遺跡群

２．調査の経過

佐田峠墳墓群周辺は江府三次道路建設にともなう一般国道183号（高道路）のバイパス整備計画の路線地内に含まれていたことから、平成９年度に庄原市教育委員会によって試掘調査が行われた。最初に見つかった四隅突出型墳丘墓の３号墓の東側に、方形貼石墓あるいは方形周溝墓かと推測される４・５号墓も確認された。このため、庄原市教育委員会と広島県庄原土木事務所（当時）の調整協議によって３号墓とその周囲の遺構確認部分が現状のまま保存されたという経緯がある。



第２図　調査区（トレンチ）配置図（1/400）

昨年度の調査では、庄原市教育委員会の試掘調査時の平板測量図に基づき、３号墓東側周辺の遺構（４・５号墓）の再確認とその詳細な記録の作成を目的とした調査を行なうことを計画した。その結果、４号墓は一辺4.5m前後となる方形墳丘と、その周囲に周溝をもつ弥生時代中期末葉前後に属する貼石墓であると判断した。しかし、北辺を区画すると思われた周溝 SD05[(2)] は調査の結果、４号墓よりも西側に延伸して掘削された溝であり、築造当初の４号墓の墳丘はさらに北側に延びる可能性が高いことが判明した。さらには４号墓をめぐる周溝 SD02 の断面観察、あるいは周溝 SD06の検出状況から、４号墓の南側に隣接して方形墳丘をもつ周溝墓が存在する可能性を指摘した（野島・矢部 2010）。これらの点を勘案して、今年度は４号墓（ｇ調査区）の西辺を基準として南北両側に再度小規模な調査区（ｉ・ｊ調査区）を設定し、４号墓の墳丘規模を再確認することとした（第２図）。また、昨年度確認した周溝 SD05の性格を確認するためにｋ調査区を設定した。ｉ調査区を齋藤友紀・

今津和也、ｊ調査区を津田真琴・谷口早季、ｋ調査区を脇山佳奈・横山瑛一が担当した。

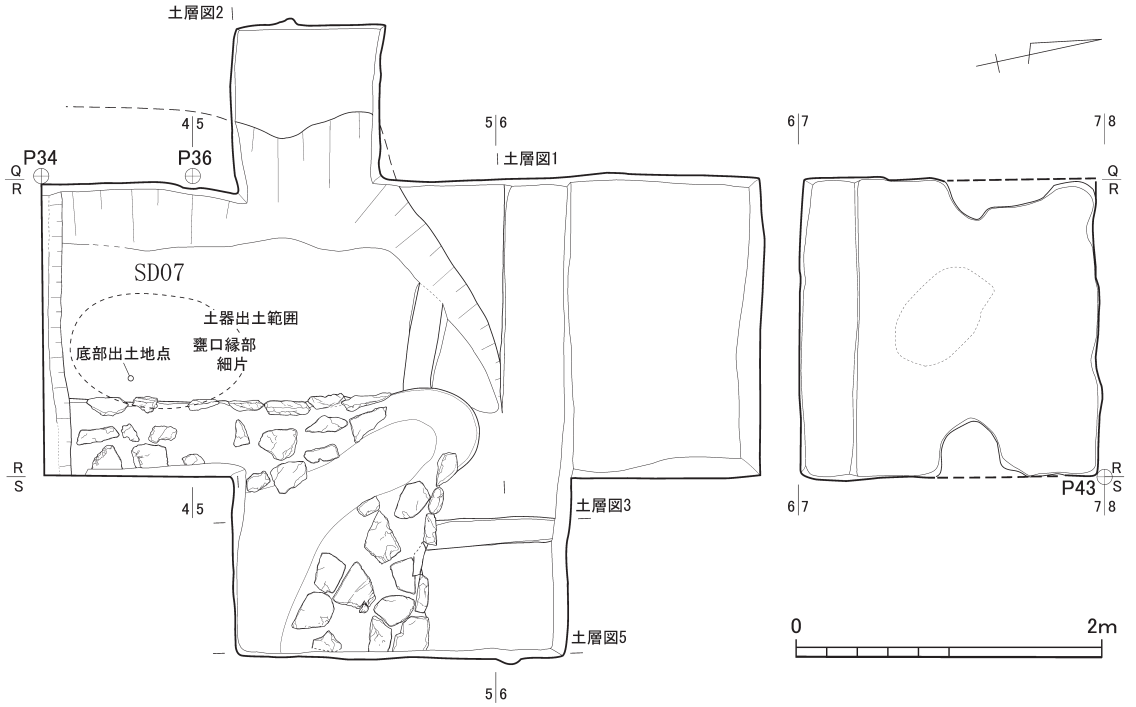
なお、今年度も夏期休業期間の発掘調査となったが、昨年度の作業状況から今回は猛暑日を避け、８月下旬から９月中旬に発掘調査を行なうこととした。考古学野外実習授業の一環とはいえ、現地発掘調査に参加していただいた学生諸氏に感謝したい[3]。　（野島）

３．ｉ調査区（第３図、カラー図版第２－ａ、図版６～９）

４号墓は東西4.5m・南北3.6mの墳丘をもち、周囲に溝をめぐらせた方形の貼石墓であるとした。しかし、周溝SD05の北側に石列が伸びていたことから、４号墓の墳丘はさらに北側に広がる可能性が高いと考えた。そこで、４号墓の規模や平面形態などを明らかにするため、昨年度の調査区であるｇ調査区①区に北接するｉ調査区を設定した（第２図）。調査当初、４と５、ＱとＲの間のグリッド・ラインの交差する点（P.36）を南西隅として、南北６ｍ・東西２ｍをｉ調査区とした。昨年度に設定した測量杭（P.34・P.36・P.37）を基準に、トータルステーションを用いてｉ調査区の北東隅に測量杭（P.43）を設置した。ｉ調査区内を２ｍごとに分割し、北から①・②・③区として、各区の北側に幅0.25mの土層観察用畦を設定した。

表土除去後の状況を撮影したのち、土層の確認を行ないながら、４号墓に関連する周溝、石列・貼石などの遺構検出に努めた。①区中央には切株があったため、土層観察用畦付近で遺構の有無を確認することとした。①区南壁沿いに幅0.4m・長さ２ｍのサブトレンチを設定して掘削した結果、表土（第１層）[4] から0.1m掘り下げたところで、地山に到達した。

②区では表土除去後、遺構の有無を確認するために、②区南壁沿いに幅0.5m・長さ２ｍ



第３図　ｉ調査区平面図（1/50）

のサブトレンチを設定して掘削した。③区の周溝SD07の検出面と同じレベルにまで掘り下げようとしたが、西側では表土下0.2m程で地山に到達した。②区南壁の土層の堆積状況を確認した結果、根による攪乱を受けたSD07の埋土（第８図１、第３層）がわずかに堆積していたのみであった。このため、①区および②区北半には４号墓に関連する遺構はないものと判断して、掘削を停止した。

③区では東端で表土から0.3m程掘り下げたところで、貼石の上面を検出し、その貼石の広がりを追いつつ墳丘部分を検出していき、石列とその西側のSD07を確認した。②区南壁および③区北壁の土層の堆積状況を観察した結果、SD07は土層観察用畦の中で収束するか、もしくは東側へ回り込むものと考えた。このため、②･③区の東側に南北2.5m･東西1.25m、西側に幅0.25mの土層観察用畦をもつｉ調査区④区を設定して掘削を行なった。また、昨年度の調査区であるｇ調査区①区の未調査部分の確認のため、③区南側に南北1.4m・東西２mの範囲を拡張した。昨年度の調査の埋め戻し土を除去後、周溝SD05とSD07の切り合い関係を再確認し、SD05を完掘したのち、SD07を掘削した。

④区南半では表土を除去する際、地表下0.15～0.2mで原位置を留めた貼石の一部を検出し、周囲の貼石から推察できる墳丘傾斜面を確認しながら、埋土（第８図３・５、第５層）を除去しつつ、石列の並びを確認した。石列の北側では周溝の有無を確認するために、西壁沿いに幅0.2m・長さ0.5mのサブトレンチを設定し、断面を確認しながら掘削を行った。④区西壁・北壁・東壁の各土層の堆積状況を観察した結果、初期の墳丘流出等にともなう堆積土（第８図３・５、第７層）の下、地山直上に整地土と考えられる土層（同第８層）を確認した。整地土は④区北側に広がっていたものの、サブトレンチにおいても溝状の掘形は確認できなかったため、墳丘北側に周溝はめぐらない可能性が高いものと判断した（図版第９）。

また、③区西側では、SD07の西側掘形を検出するために、南北１ｍ・東西１ｍの範囲を拡幅して掘削し、SD07の西側掘形の一部を検出した。

各区で状況撮影、レベルの記入、土層断面図作成などを行なったのち、４号墓北西コーナー部分で、SD07と石列・貼石の広がり、墳丘北西隅部の全体像を把握するために、②区南壁・③区南壁・④区西壁の土層観察用畦を除去した（第５図）。墳丘隅角の裾部付近を精査した結果、４号墓北西コーナー部分には明確な突出部があることを確認した（カラー図版第２－ａ、図版第６・７）。なお、ｉ調査区③区の土層観察用畦付近でSD07の埋土（第８図２、第11層）から弥生土器片が出土した（第４図）。写真撮影、レベルの記入などを行なって取り上げた。

（１）周溝SD07（第３図、図版第８）

ｉ調査区③区で検出した周溝SD07は、昨年度の調査においてｇ調査区①区北西で確認したSD07の延伸する部分である。墳丘西側を南北に走り、底面で幅1.0m前後となる。遺存状況はよく、検出面からの掘削深は最大0.4m、検出された浅い掘形の上場は幅1.8m前後である。４号墓北西突出部分に行くにつれて､溝幅を減じながら収束する。SD07は周溝SD05によって掘削されているが、昨年度確認した周溝SD01と溝幅および掘削深がほぼ同じであること

第４図　ｉ調査区③区
弥生土器片出土状況（西から）

第５図　作業風景（北西から）

から、SD07とSD01は同一の周溝であると判断できる。SD01の南端は周溝SD02によって再掘削される。ｉ調査区③区南側の土層観察用畦付近で床面直上（第８図２、第11層）から、甕形土器の口縁部と胴部の細片が出土した（第３・４・９図１）。

（２）４号墓北西突出部分（第３図、カラー図版第２－ａ、図版第６・７・９）

ｉ調査区③区北側および④区西側で、４号墓北西コーナー部分の墳丘突出部を検出した。突出部の遺存状況は良好で、墳丘西側・北側の石列・貼石は原位置をほぼ留めていた[5]。突出部先端部分は半円に近い形状を呈する。先端部分には石列・貼石の抜き取り痕跡などもなかったことから、当初から石列と貼石を置かなかったようである。先端部には幅約30㎝のなだらかな平坦面があり、墳丘頂部に向かってスロープ状に続く。突出部から墳丘西面には厚さ10㎝前後の板状角礫がほぼ直線的に立てて並べられる。墳丘北面の石列も西面同様に厚さ10㎝前後の板状角礫を用いるが、突出部付近ではわずかに墳丘外側にカーブを描くように配されている。墳丘西面で検出された２段の貼石は10～30㎝弱とやや不揃いの角礫を石列と並行するように配置している。墳丘北面で検出された３段の貼石は20～30㎝大の角礫を用いて、石列と並行するように、ある程度揃えるように配置されている。

（今津和也・野島）

４．ｊ調査区（第６図、図版第10）

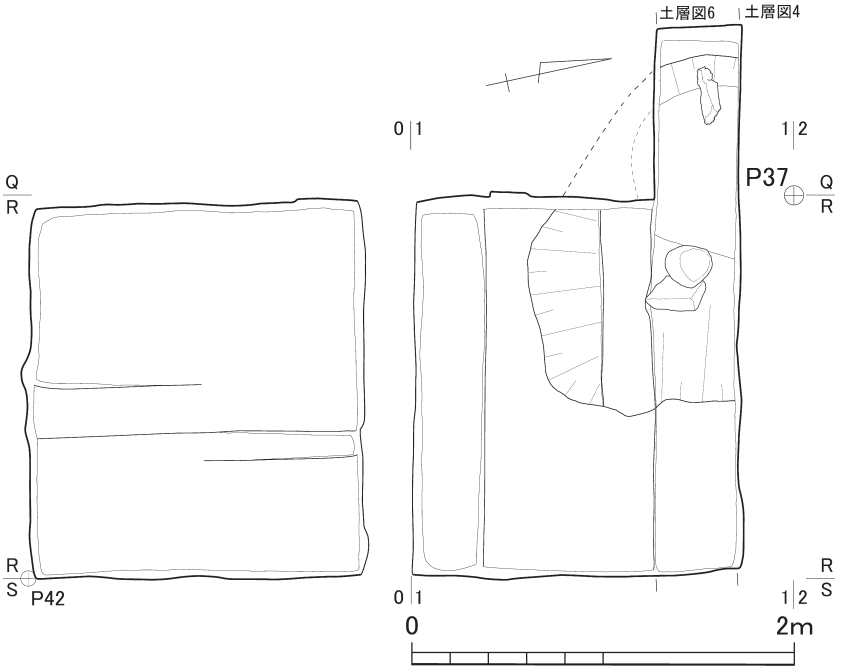
昨年度の調査によって、ｇ調査区②区南側で検出された４号墓南側の周溝SD02は、東から西へ延びる際に幅を広げながら南側へと湾曲していく様相が確認できた。またSD02土層断面から南側に盛土と思われる土層の堆積が確認でき、４号墓南側に周溝を共有して別の墳丘が存在する可能性が想定された。よって今年度はSD02の延伸状況を確認すること、また４号墓南側の墳墓等の有無を確認することを目的として、１と２、ＱとＲの間のグリッド・ラインが交差する点（P.37）を北西隅の基準として、ｇ調査区②区の南側にｊ調査区を設定した。南北４ｍ・東西２ｍの調査区を北から２ｍごとに①・②区とし、各区の北側に幅0.25ｍの土層観察用畦を設定した。また調査区の南東隅に測量杭（P.42）を追加した。

調査の結果、①区では北西部において表土から0.25mほど掘り下げたところで幅1.0m程度の扇状を呈する黒褐色土（第７層）の広がりを検出し、SD02の埋土検出面であると判断した。このSD02の堆積状況を確認するため、①区北側畦に沿って幅0.4mの断ち割りを行った結果、SD02が①区のさらに西側に延伸していることが確認された。そのため先述の幅0.4mの断ち割りに沿うように西側に南北0.4m・東西0.9mの①区拡幅区を再度設定し、その西端でSD02の西側掘形を検出した。

②区は、北から南に向かって自然に傾斜しながら落ちていく地形となっていた。その南側において一帯に黒褐色の土層堆積が確認されたため、新たな周溝である可能性も想定し、幅0.25mの土層観察用畦を残して掘削した。その結果、溝の掘形や盛土と考えられる層も確認されなかったため、②区には遺構がないものと判断した。よってｊ調査区内においてはSD02とその下面の盛土以外に遺構は検出されず、４号墓南側に他の墳丘が存在する可能性は低いと考え、掘削を停止した。

（１）周溝SD02（第６図、図版第10－ｂ）

①区北西から検出された溝状遺構は、昨年度の調査で検出された４号墓南西から続く周溝SD02の南側延伸部分であると考えた。検出範囲は西限を①区拡幅区西端とし東西1.8m程度、南北1.0m程度で急速に収束しており、昨年度のSD02検出部分に比べて南側に大きく湾曲するのが特徴である。本年度検出されたSD02は、最大幅約2.0m・最大深約0.4mであり、最深部が南西側に大きく偏っている。昨年度検出された４号墓南西におけるSD02が最大幅約1.0m・最大深約0.5mであったことと比較すると、本年度検出された範囲での上面幅は大きく広がる。先述の①区北側の土層観察用畦から、東側は盛土（第８図４、第10～12層）をともない比較的緩やかな斜面を形成するのに対し、西側の掘形の傾斜は急であり、地山を深く掘り込んだ状態のままであることがわかった（第８図４）。とくに東側では緩く地山を掘り込んだ後、盛土が３層にわたって施されており、昨年度のSD02断面の様相（野島・矢部 2010、30頁、第10図４）とも類似する。断面の観察か



第６図　ｊ調査区平面図（1/40）

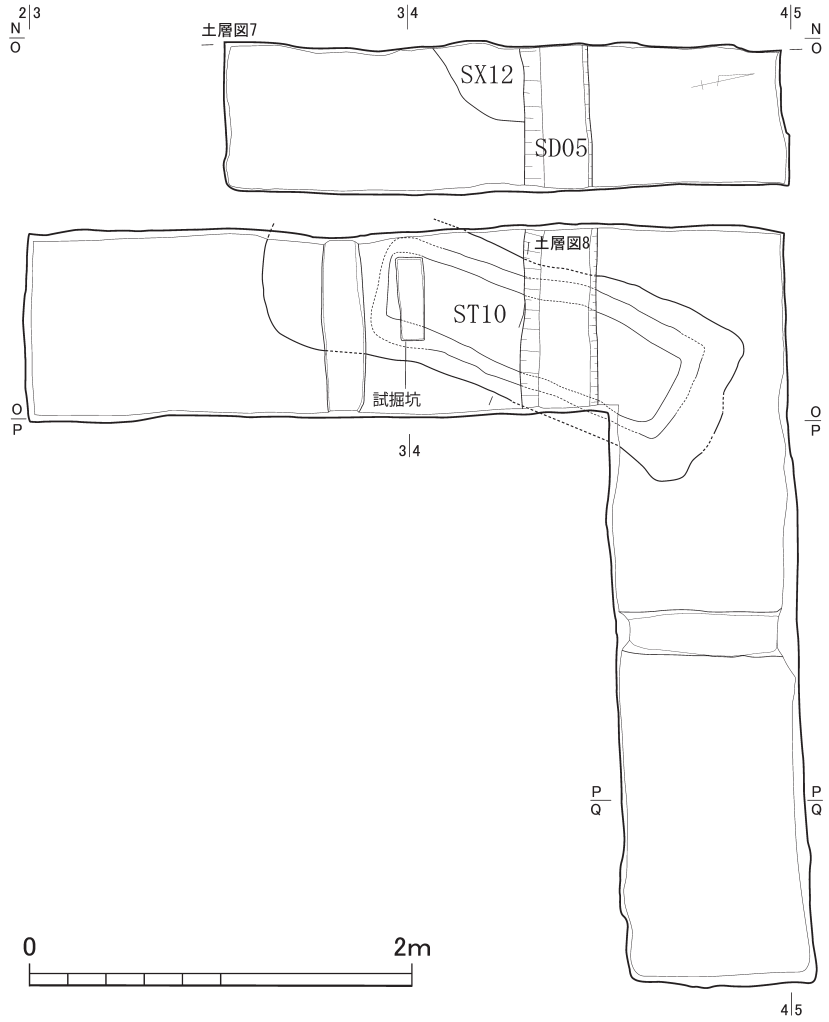
らすると、昨年度・今年度ともに地山を掘り込み盛土を施した後に、再び溝 SD02の掘削が行われた可能性が高いと判断できる。一方で、ｊ調査区北側断ち割りの南壁（第８図６）ではこの盛土は確認されず、地山を緩く掘り込んだままの状態であった。また SD02埋土（第７～９層）の堆積はなだらかであり、流出土などの自然堆積により埋没したと考えられる。なお、SD02埋土（第８図４・６、第７層）からは弥生土器細片２点が出土しており、そのうち口縁部の１点を図化した（第９図２、図版第13－ａ）。SD07より出土した土器（第９図１）よりも新しい様相をもつ。

また今年度の調査で４号墓北西に突出部が検出されたことから、４号墓南西にも突出部があったことが想定される。しかし、その北西突出部の検出がｊ調査区掘削終了後であったため、時間的制約により南西の突出部の位置ついて確定することはできなかった。４号墓南西隅の突出部がかりに周溝 SD02上部にあったと想定した場合、SD02下面からみつかった盛土はその突出部を改変する際に堆積したものとも想定できる。SD02は４号墓を改変する際、新たに掘削された溝である可能性が高い。（津田真琴・谷口早季）

５．ｋ調査区（第７図、カラー図版第２－ｂ、図版第11・12）

ｋ調査区は昨年度の調査に際して確認された溝 SD05の、ｇ調査区西側での様相を明らかとするために設定した。当初、南北２ｍ・東西２ｍの規模で設定した調査区は４－Ｏグリッドに対応する。また調査区中央には､南北方向に延びる幅0.2ｍの土層観察用畦を設定した。SD05は平成９年度に、庄原市教育委員会によって実施された試掘調査の際に確認された。そのため当調査区は、まず試掘調査区内の埋め戻し土（第８図７、第４層）を取り除くこととした。しかし、試掘調査の情報が簡易なものであったため、試掘調査区の正確な範囲を特定することができず、ｋ調査区の表土を除去した時点で設定した調査区内に収まらないことが判明した。このため、調査区を南側へ１ｍ拡幅した結果、幅1.3ｍの試掘調査区埋め戻し土を確認した。先述の通り、SD05はｇ調査区西側での様相が明らかではなく、試掘調査の情報からはｋ調査区内で南北方向に湾曲または分岐している可能性も考えられた。しかし、実際には上記のような変化を見せることはなく、西側へと直進することを確認した。ただし SD05は西側へと行くに従って徐々に浅くなっており、調査区外近辺で収束している可能性が高い。また SD05は調査区東側と西側で、それぞれ後述の埋葬施設 ST10と性格不明遺構 SX12を掘削し､破壊している（図版第12）。このことから SD05は両遺構よりも新しいと判断した。

ST10は試掘調査時において、埋め戻し土を除去した段階では調査区北端付近で東へと曲がる周溝状遺構と判断していたため、呼称も周溝 SD10としていた。そこで SD10の延伸部分の広がりを追うため、幅１ｍで東側へと段階的に拡張を行ない、総長は３ｍに及んだ。また SD10は南方向へも調査区外に延伸していると判断したため、土層観察用畦の東側観察面を延長させ、さらに南北１ｍ・東西１ｍの拡幅を行った。しかし SD10が東へと屈曲すると判断していた部分の精査を行った結果、その遺構は北東隅部分が拡張区域にかかる墓壙であることが判明し、名称を埋葬施設 ST10と変更した（カラー図版第２－ｂ、図版第11－ａ）。同時



第７図　ｋ調査区平面図（1/40）

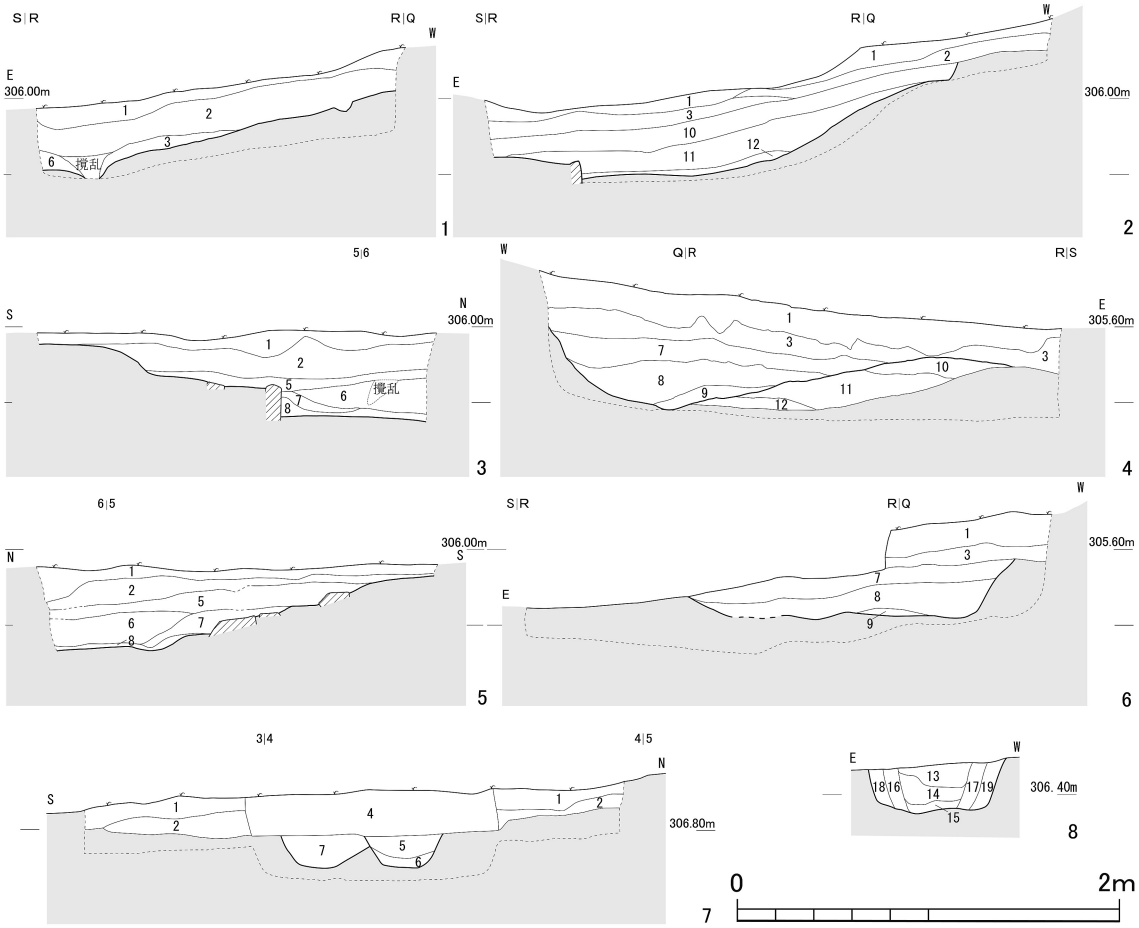
にそれまでSD10としていた東へと伸びる部位は、試掘調査区埋め戻し土からこれに沿うかたちで伸びた、笹根に起因する土質・土色の変化であることが明らかとなった。なおST10の上部については、削平を受けており遺存しない。

調査区西側でSD05と接する状況で確認されたSX12は、平面の様相からではその切り合い関係が判然としなかったため、調査区西壁において試掘調査区幅を長軸とし、0.2m幅の断ち割りを設定した（第８図、図版第12－ｂ）。その結果、SX12はSD05に破壊されていることが明らかとなったが、具体的な時期差は明らかにはできなかった。

（１）溝 SD05（第７図、図版第12）

溝SD05は調査区を東西に走る溝で、幅0.35～0.4m、検出面からの深さ0.2m前後である。試掘調査における写真や平板図から、また昨年度ｇ調査区①・④区で検出された周溝SD05とほぼ一直線上に位置することから、同一の遺構であることを再確認した。SD05はさらに調査区西側にも延伸すると考えられる。ｋ調査区のSD05の床面は最も標高の高い地点で306.6mである。一方、ｇ調査区において検出された最も標高の低い地点は305.39mであり、約1.2mの標高差がある。SD05は約0.2～0.25mの深さを保ち、なだらかに弥生時代の旧地形にそって西から東へと低くなっていることがわかる。

SD05は埋葬施設ST10よりものちに掘削された溝であることが切り合い関係から確認できた。なおSD05埋土掘削中より弥生土器細片を１点出土したが、図示できない大きさである。



第８図　各調査区土層図（1/20）

（２）埋葬施設 ST10（第７図、カラー図版第２－ｂ、図版第11）

埋葬施設 ST10は調査区中央部付近で検出した。試掘調査区の埋め戻し土を除去し、精査した段階で、北東・南西方向にのびる ST10の墓壙の一部と木棺痕跡を平面的に確認した。埋葬施設の主軸は北から東に35度振っており、３・４・５号墓の埋葬施設の主軸が南北方向であったこととは異なっている。検出時点で木棺痕跡が確認されている点から、本来の墓壙上面は検出面よりも高い位置であったと考えられる。試掘調査区外においても、表土層の直下で墓壙を平面的に検出しており、ST10にともなう墳丘盛土などは確認できなかった。墓壙の大きさからは本来 ST10には墳丘が存在していた可能性も考えられよう。

墓壙の形状は北東部では隅丸方形を呈し、南西部では丸みをおびる。墓壙の規模は最大長2.55m、幅は中央部で0.72m、北東端で0.85mである。墓壙の底面は、ST10に直交する断ち割りで確認すると幅0.59mで、中央はやや盛り上がるがほぼ平らである。

墓壙内に納められた木棺痕跡は、平面および断面にて観察した（第８図８、図版第11）。平面プランにおける木棺痕跡の南西部は一部不明瞭であったが、それ以外の部分に関しては明瞭に長方形の木棺痕跡を確認することができた。検出面において、木棺内径は長さ約1.6m、幅は中央部0.35m、南西端0.35m、北東端0.40mであり、木棺の深さは0.2m前後である。

木棺側板の横断面は底部に向かって湾曲しており、およそ断面U字形に近い。側板の横断面が箱形木棺のように垂直ではない状況から、刳抜き式木棺の可能性が高い。側板の幅（第８図８、第15・16・17層、図版第11－ｂ）は６～８cmである。木棺痕跡の平面プランから北東端を観察すると、木棺端部は一定幅を残して内部を刳抜き、身と小口を一体のものとして作り出していると判断できる。裏込め土は、ST10と直交に設定した断ち割りでは東側・西側ともに１層（第８図８、第18・19層）ずつ確認できた。墓壙と側板の間には地山に由来するクサリ礫を多く含む混合土を充填しており、地山と同質の土を用いたようである。ST10の南側に設定したサブトレンチでは、裏込め土を４層確認し、南側は複数回にわたって裏込めが行われたと考えられる。木棺痕跡の内側には棺内に流入した土（第８図８、第13・14層）を確認した。

なお、ST10の時期については、SD05埋土を除去した段階で木棺痕跡を明瞭に確認できた点から、木棺が完全に腐朽した後にSD05によって掘削されたものと考える。このことからST10は、４号墓が周溝SD05によって改変される時期にはすでに木棺が完全に腐朽するほどの時間が経過していたと推測でき、ST10とSD05の時間差のほうが４号墓とSD05の時間差よりも大きいと思われる。SD05掘削時に墳丘が存在していたとすると、ｋ調査区の溝も深く掘削されたと考えられるが、ｇ調査区からｋ調査区にかけて確認されるSD05は、深さ約0.2mと一定の深さを保っていることから、ｋ調査区のみ非常に深く掘削された可能性は低いと考えられ、SD05の掘削からみれば、ST10の墳丘はたとえ存在したとしてもかなり低いものと考えられる。また、先述したようにST10は３・４・５号墓の埋葬施設と主軸に共通性がなく、このこともST10と４号墓の築造時期にはかなりの時間差を想定できる根拠の一つとして指摘しておきたい。

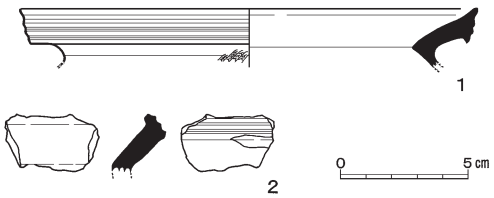
（３）性格不明遺構SX12（第７図、図版第12）

性格不明遺構SX12は、SD05の南側に位置し、調査区の西側で部分的に検出した。埋土は1層（第７層）確認でき（第８図７）、現存する深さは0.2mである。調査区西側に設定した断ち割り断面の観察から、SX12はSD05の掘削によって破壊された状況が確認でき、SD05よりも新しい。なおSX12の掘削および西側への広がりを確認するための調査は行っておらず、規模は不明である。　（脇山佳奈・横山瑛一）

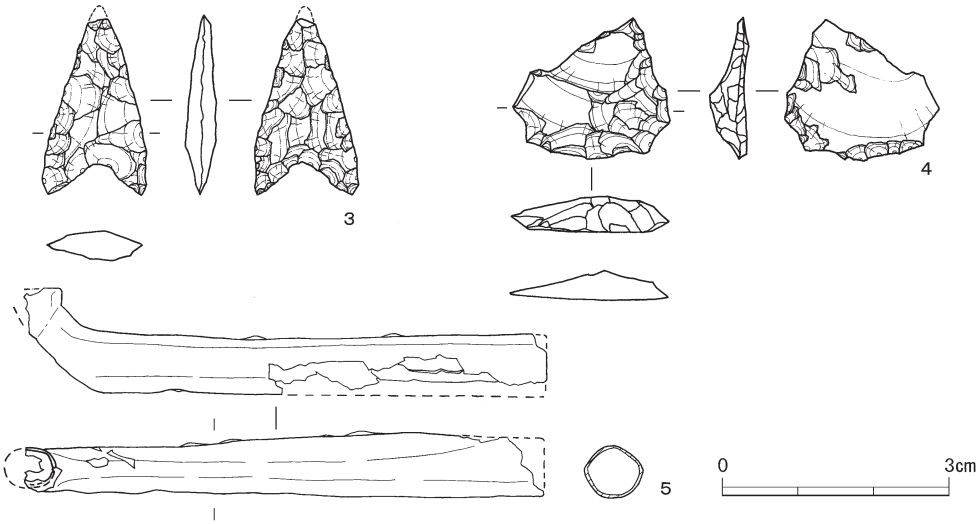
６．出土遺物

（１）弥生土器（第９図、図版第13－ａ）

全調査区から計50点を超える土器細片が出土した。すべて破片資料で完形に復原できるものはなかったが、破片資料の一部は昨年度の調査で出土した甕形土器片と同一の個体である。今年度出土した土器細片で図化できたものは甕形土器片が１点である。なお、４号



第９図　佐田峠墳墓群４号墓出土土器（1/3）



第10図　佐田峠墳墓群出土石器・煙管（1/1）

墓周溝 SD01・07にともなう甕形土器は少なくとも３個体となる。

甕形土器（第９図１・２）　１は昨年度報告した土器片（野島・矢部 2010、33頁、第12図２）を修正したものである。今年度の調査でその土器片と同一個体と思われる土器片がｉ調査区③区周溝 SD07の埋土下層（第８図２、第11層）から出土した。今年度出土した土器片は内外面の損耗が激しいものの、昨年度出土した土器片と併せて口径を復原することができた。その結果、口径は17.4cmから18.3cmに、頸部の外面の刻み目文様の位置を修正した。２はｊ調査区①区拡幅区周溝 SD02の埋土（第８図４・６、第７層）から出土した口縁部である。口縁端面は内傾し、明瞭な２条の凹線と口縁端面の最上部には不明瞭ながらも凹線が確認できるため、３条の凹線を持つと考えられる。内面は灰黄褐色を呈し、ナデ調整が認められる。胎土に石英・長石などの砂粒が目立つ。（今津・横山）

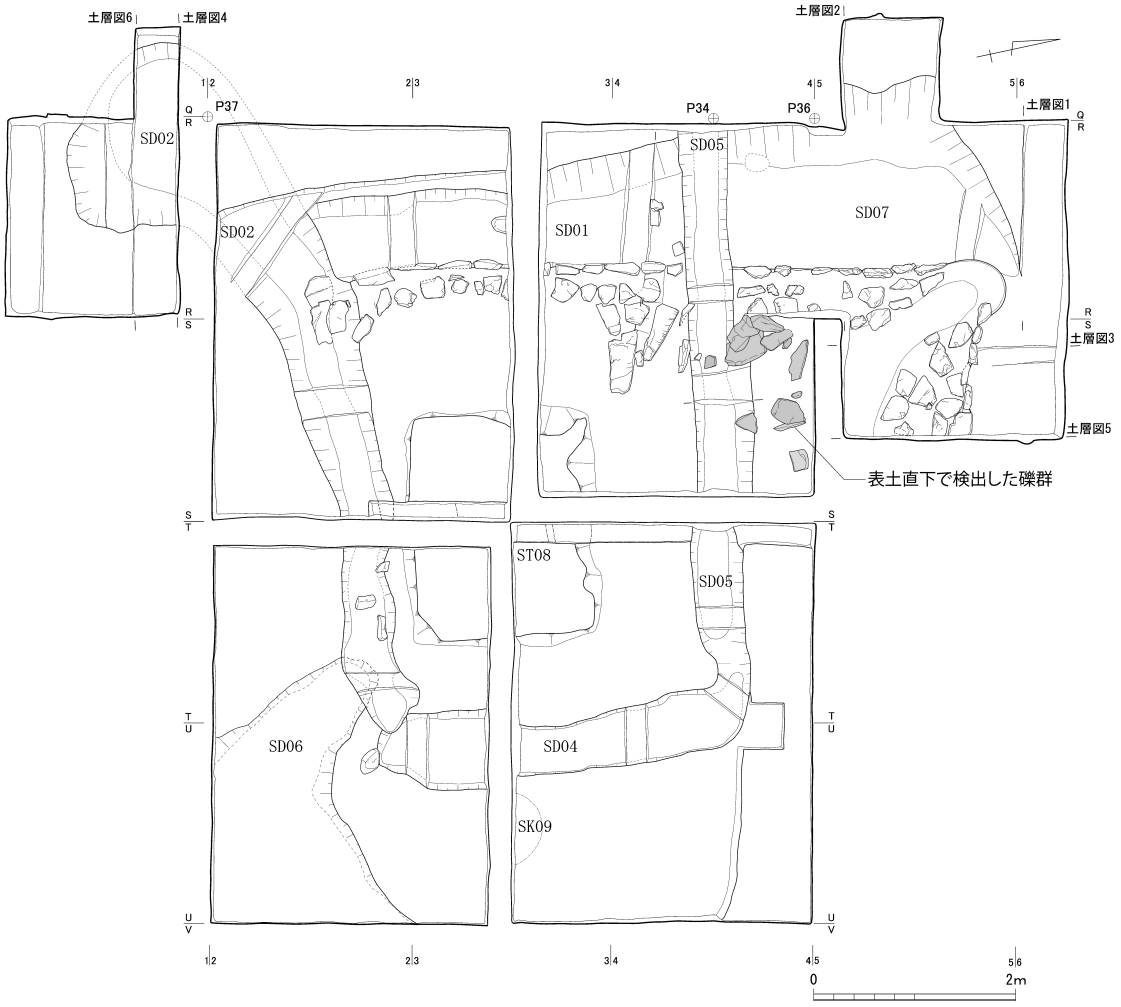
（２）その他の遺物（第10図、図版第13－ｂ）

今年度の調査では弥生土器片の他に、石鏃や黒曜石を素材とした二次加工のある剥片および砕片、煙管が出土した。

石　鏃（第10図３）　ｉ調査区④区第１層から出土した縄文時代の凹基無茎鏃である。現存長2.4cm・幅1.4cm・厚さ0.4cm で上端を欠損する。安山岩製で、精緻な押圧剥離が施され、素材面をほとんど残さない。

二次加工のある剥片（第10図４）　ｋ調査区表土直下から出土し、時期は不明である。長さ1.9cm・幅2.1cm・厚さ0.5cm であり、島根県隠岐島産と考えられる漆黒の黒曜石製である。背面上端に折損にちかい剥離がみられ、それを切るように縁辺に細かな加工が施される。

煙　管（第10図５）　ｉ調査区②区第２層から出土した鍛造品であり、素材である真鍮を厚さ0.05cm前後まで鍛打して成形している。現存長は約7.0cm で、火皿と首部の口径はそれぞれ0.55cm と0.65cm である。火皿と首部には欠損が認められる。脂反しには小さな屈曲が観察されるが、首部全体としては直線的な形態を示していることから古泉弘氏による編年（古



第11図　ｇ・ｉ・ｊ調査区平面図（1/75）

泉 1992）のＶ段階後半、幕末から明治初頭期のものと考えられる。　　（谷口・横山）

７．調査の成果

昨年度の発掘調査によって、４号墓の墳丘は北方の調査範囲外に伸びていたことが判明し、北側調査区外に墳丘の一部が遺存している可能性が高くなった。このため、今年度は昨年度のｇ調査区の南北にｉ・ｊ両調査区を設定し、４号墓の築造当初の墳丘規模を再確認するため発掘調査を行なった（第11図）。

４号墓の墳丘北西隅部を検出したところ、その墳丘形態は当初、長方形の墳丘をもつ四隅突出型墳丘墓であったことが判明した。墳丘築造後、溝 SD05によって４号墓の北側が再掘削され、墳丘が改変された可能性があることが判明した。SD05は後述するように４号墓の西側で埋葬施設 ST10をも掘削して破壊しており、４号墓を区画するためにのみ掘削されたものではなかった。この溝 SD05の掘削時期については調査中にもたびたび問題となり、その掘削時期が古墳時代以降にまで降る可能性も想定された。しかし、次の理由から SD05は弥

生時代における掘削、あるいは佐田峠墳墓群の墓域において造墓活動が終息する以前に掘削された可能性のほうが高いものと判断した。つまり、SD05は現地表下22cmで確認された埋葬施設ST10と現地表下45cm前後で確認された周溝SD07の両遺構の床面とほぼ同じレベルに掘削されている[(6)]。ｋ調査区の項でも指摘したように、弥生時代の遺構に沿う掘削深であるといえる。また，昨年度報告したように、SD05南肩に沿って２石が立石状に貼り込められたことも４号墓が埋没する以前に改変されたと考える根拠となる。４号墓の墳丘東辺を画する周溝SD04に連結する状況が確認されたことからも、４号墓とSD05の掘削にそれほどの時期的隔たりがないことが想定できる。しかし、この改変が意図的であるというよりは、周溝に外部からの溝を連接させた偶発的なものである可能性も否定できない。

墳丘南西では突出部は検出されなかったが、周溝SD02によって突出部および墳丘の一部が削平された可能性が高くなった。かりにSD02が突出部を破壊したのちに再掘削されたものであるとすると、墳丘の南北の規模は8.1m前後となる。墳丘東側はすでに当初の周溝下面まで削平されており、東西規模を復原することは難しい。

平成９年度の庄原市教育委員会の試掘調査によって、４号墓の西側に延びるSD05や他の遺構（溝）が確認されていたが、昨年度はSD05からの出土遺物はなかったために、その詳細は不明であった。そこで今年度は４号墓の西側にｋ調査区を設定し、遺構確認調査を実施した。その結果、試掘時に周溝と考えられていた遺構は墓壙掘形と、その内部に設置された木棺痕跡であることが判明した。この埋葬施設ST10については出土遺物がないため、厳密な時期の確認はできなかった。ただし、SD05によって破壊された付近の木棺痕跡には乱れがほとんど確認できず､木棺木質がほぼ完全に腐朽してから掘削破壊されたものと考えられる。SD05の掘削が４号墓の築成からそれほどの時間を経ておらず、ST10の埋設後、木材が腐朽するぐらいの時間が経っていたと仮定すれば、ST10は４号墓よりも遡る時期に属するものと考えられよう。

佐田峠墳墓群（Ｃ区）は弥生時代後期前葉を中心とした佐田谷墳墓群に先行する墳墓群であり、両墳墓群では弥生時代中期後葉から後期前葉まで、四隅突出型墳丘墓が変容・発展していく過程を認めることができる。今回新たな埋葬施設も確認できた。四隅突出型墳丘墓や方形周溝墓などを造営しつづけ、墳墓の改変といった活発な造墓活動を認めることができ、初期弥生墳丘墓の発展過程を垣間見ることができる重要な遺跡であるといえよう。

（野島・齋藤）

註

(1) 周辺の遺跡については野島・石貫・小林・辻村・宮岡 2009文献を参考にしていただきたい。

(2) 便宜上、４号墓にかかるｇ調査区の溝を周溝SD05とし、ｋ調査区のものを溝SD05として記述するが両者は同一の遺構である。

(3) 調査参加者は以下のとおりである。本概要報告については大学院生による分担執筆を行なった。
広島大学大学院後期生：脇山佳奈
広島大学大学院前期生：齋藤友紀・津田真琴・今津和也・谷口早季・横山瑛一

広島大学学部生：伊川桃子・小林新平・東　麻衣・松永直輝・三浦　晋・水川祐樹・関内由衣・中神恵美・藤井翔平

(4) 土層に番号をつけるにあたり、ｉ調査区では②区南壁、ｊ調査区では②区南壁、ｋ調査区では北壁の層序をそれぞれ基準とし、他の壁面で新しく確認した層には、その続きの番号をつけることとした。したがって、例えばｉ調査区第１層、第２層といった１つの層番号はｉ調査区では同一の層であるが、ｊおよびｋ調査区の第１層、第２層とは同一の層ではない。また、それらの層序番号が堆積の順序を示しているわけではない。

(5) 表土から浅い位置にある貼石のレベルは個々に乱れており、植林の際の重機による沈下の可能性がある。

(6) 試掘区の再発掘を行っているため、今回確認はできなかったが、試掘では埋葬施設 ST10と周溝 SD07とはほぼ同じレベルで検出されているようである。

引用・参考文献

池淵俊一　2007　「山陰における方形区画墓の埋葬論理と集団関係」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、117～143頁。

石貫弘泰・斉藤　礼　2008　「佐田峠墳墓群（第１次）調査」『広島大学大学院文学研究科　帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』ＸＸⅡ、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室、34～36頁。

稲垣寿彦編　1999　『妙見山遺跡』広島県庄原市教育委員会。

稲垣寿彦編　2000　『広島県史跡　唐櫃古墳』広島県庄原市教育委員会。

稲垣寿彦編　2001　『和田原Ｃ地点遺跡発掘調査報告書』広島県庄原市教育委員会。

稲垣寿彦・今西隆行編　2004　「和田原Ｅ地点遺跡・小和田横穴墓」『庄原市農業支援施設建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』広島県庄原市教育委員会。

稲垣寿彦・今西隆行　2005　『広島県史跡唐櫃古墳整備事業報告書』広島県庄原市教育委員会。

落田正弘　1996　『陣山遺跡』三次市教育委員会。

桑原隆博　1982a　「小和田遺跡」『西山・小和田・永宗－国道183号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター、31～50頁。

桑原隆博　1982b　「西山遺跡」『西山・小和田・永宗－国道183号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター、９～30頁。

古泉　弘　1992　「日本の初期煙管に関する覚書」『平井尚志先生古稀記念考古学論攷』第Ⅱ集、郵政考古学会、117～133頁。

沢元保夫　1982　「永宗遺跡」『西山・小和田・永宗－国道183号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』広島県教育委員会・広島県蔵文化財調査センター、51～70頁。

妹尾周三　1986　「江ノ川中・上流域における墓制からみた弥生時代中・後期の社会－佐田谷１号墓の調査とその意義を中心として－」『芸備』第17集、17～34頁。

妹尾周三編　1987　『佐田谷墳墓群』広島県埋蔵文化財調査センター調査報告書第63集、広島県埋蔵文化財調査センター。

妹尾周三　1996　「佐田谷墳墓群の調査」『芸備』第25集、10～19頁。

野島　永　2008　「佐田峠墳墓群2007年度の調査」『広島大学大学院文学研究科　帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』ＸＸⅡ、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室、１～３頁。

野島　永・石貫弘泰・小林昂博・辻村哲農・宮岡昌宣　2009　「佐田峠墳墓群（第２次）調査」『広島大学大学院文学研究科　帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』ＸＸⅢ、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、23～52頁。

野島　永・矢部俊一　2010　「佐田峠墳墓群（第３次）調査」『広島大学大学院文学研究科　帝釈峡遺跡群発

掘調査室年報』ＸＸⅣ、広島大学大学院文学研究科帝釈峡遺跡群発掘調査室・考古学研究室、23～39頁。

藤田広幸　1988 『和田原遺跡』広島県埋蔵文化財センター調査報告書第68集　広島県埋蔵文化財調査センター。

松井和幸編　1999 『和田原Ｄ地点遺跡発掘調査報告書』広島県埋蔵文化財センター調査報告書第186集、簡易保険福祉事業財団・庄原市教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター。

渡辺貞幸　2003 「四隅突出型弥生墳丘墓の「突出部」『新世紀の考古学－大塚初重先生喜寿記念論文集－』大塚初重先生喜寿記念論文集刊行会、219～234頁。

渡辺貞幸　2007 「まとめにかえて－四隅突出型墳丘墓概説－」『四隅突出型墳丘墓と弥生墓制の研究』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター、199～205頁。

付表１　佐田峠４号墓・４号墓周辺土層観察表

i調査区

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	灰黄褐色土	10YR4/2	-	-	土性は砂質土で、2～5㎜の礫を含んでおり、層全体に攪乱がみられる。	表土
第2層	にぶい黄褐色土	10YR5/3	弱	-	シルト質で2～3㎜の礫を含んでいる。第1層と同様、攪乱がみられる。	自然堆積土
第3層	暗褐色土	10YR3/4	やや弱	弱	シルト質で礫はほとんどない。	SD07埋土
第5層	黄褐色土	10YR5/6	弱	やや強	シルト質で、礫はほとんど含まない。	遺構埋土
第6層	暗褐色土	10YR3/3	弱	やや強	シルト質で、礫はほとんど含まない。	遺構埋土
第7層	暗褐色土	10YR3/4	弱	やや強	シルト質で、2㎜程度のクサリ礫を1%含む。	遺構埋土
第8層	明黄褐色土	2.5YR6/6	弱	やや強	シルト質で、2～5㎜程度のクサリ礫を5%含む。	整地土
第9層	にぶい黄褐色土	10YR5/1	無	強	シルト質で、1～2㎜程度のキビ土を2%程度含み、ややグライ化している。	自然堆積土
第10層	灰黄褐色土	10YR5/3	ほぼ無	やや弱	シルト質で、砂粒は含まず、径1～2㎜のキビ土を1～2%程度含む。	SD07埋土 および遺構埋土
第11層	黒褐色土	10YR3/1	弱	ほぼ無	黒ボク土に近い層。砂粒は含まず、シルト質でキビ土を含む。	SD07埋土
第12層	暗褐色土	10YR3/3	弱	弱	砂粒はほとんど含まず、径5～10㎜程度の黄褐色土・黒褐色土のクサリ礫のブロックを20%程含む。カーボンが少量出土する。	整地土

j調査区

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	–	–	–	–	–	表土
第3層	灰褐色土	7.5YR4/2	やや弱	強	細砂質土をベースとし、もろい砂質土を含む。	自然堆積土
第7層	黒褐色土	10YR3/1	やや弱	強	シルト質土をベースとする。	SD02埋土
第8層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	強	強	細砂質土をベースとし、径2mm程度のキビ土ブロックが混じる。	SD02埋土
第9層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	強	強	粘質土をベースとし、径2mm程度のキビ土ブロックが混じる。	SD02埋土
第10層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	弱	弱	シルト質土をベースとし、径1mm程度のキビ土ブロック混じる。	盛土
第11層	褐色土	10YR4/6	強	強	砂質土をベースとし、径3mm程度のキビ土ブロックが混じる。	盛土
第12層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	強	弱	粘質土をベースとする。	盛土

k調査区

層序	土色名	土色	粘性	しまり	詳細	性格
第1層	-	-	-	-	竹根の侵食を受ける。	表土
第2層	にぶい黄褐色土	10YR4/3	弱	やや強	堆積範囲が狭い。西の3号墓方向から流れてきたと考える。	自然堆積土
第4層	-	-	-	-	試掘調査終了後の埋め戻し土層。竹根の侵食が著しい。	埋め戻し土
第5層	にぶい黄褐色土	10YR5/3	弱	強	砂質土をベースとし、径2～5mmのクサリ礫をまばらに含む。	SD05埋土
第6層	にぶい黄褐色土	10YR5/3	やや強	強	砂質土をベースとし、径2mm程度のクサリ礫をまばらに含む。	SD05埋土
第7層	にぶい黄褐色土	10YR5/3	弱	強	砂質土をベースとし、径2～8mm程度のクサリ礫をまばらに含む。	SX12埋土
第13層	黒褐色土	10YR2/3	非常に弱	非常に弱	砂質土をベースとし5～15mmのキビ土ブロックをやや含む。黒ボクも含む。	木棺内埋土
第14層	暗褐色土	7.5YR3/3	非常に弱	やや強	砂質土をベースとしキビ土ブロックをやや含む（10%）、地山に含まれる明褐色（7.5YR5/6)の礫（5～15mm）をやや含む（10%程度）。	木棺内埋土
第15層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	やや強	やや強	砂質土をベースする。礫などは含まれない。	木棺内埋土
第16層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	やや強	やや強	粘質土をベースする。1～3mm程度の砂粒を含む。キビ土ブロック（10mm程度）をやや含む。	木棺痕跡
第17層	にぶい黄褐色土	10YR5/4	やや強	やや強	粘質土をベースとし、1～3mmの砂をやや含む。	木棺痕跡
第18層	褐色土	10YR4/4	強	強	粘質土をベースとし、2～5mmのクサレ礫を多く含む（10%）。地山土を裏込めとして使用していると考える。	裏込め土
第19層	褐色土	10YR4/4	強	強	粘質土をベースとし、1～4mmのクサレ礫を多く含む（10%）。地山土を裏込めとして使用していると考える。	裏込め土